2学年通信

新宮町立新宮東中学校
令和7年４月17日 第6号
文責：江頭 俊輔

［入学式の校長先生の話から！］

４月９日（水）に行われた入学式の校長先生からのお話の中で、是非、みなさんに紹介したい内容があるので、一緒に確認したいと思います。（ちなみに、私は始業式や終業式などの節目で行われる校長先生のお話の内容をとても楽しみにしています。おそらくみなさんも同じように考えてくれているはずなので、今回は私が代弁する形ではありますが、是非、積極的に校長先生にも話しかけてみてくださいね！）

［「どうせ、無理。」をやめよう！］

さて、校長先生のお話の中で登場したのは、植松電機社長の植松努さんです。（下図）この植松さんは、

技術的にも金銭的にもとても難しいとされているロケットづくりに民間人として取り組み、それを成功させ、あのNASA（アメリカ航空宇宙局）からも認められている人です。植松さんの会社では当時世界に３台しかなかった無重力状態を作り出すことができる装置も開発し、保有しています。この植松さんが世間的に有名となったのは、2014年のTED×Sapporoでの公演がきっかけだと思います。（この映像はYoutubeでも公開されています。気になる人は是非、「Hope invites / Tsutomu Uematsu」で検索してみてください。必見の内容です。）

植松さんにとっての宇宙開発事業は「夢」ではなく、「手段」にすぎないというのが、この公演の中で語られていて、私が最も驚いた部分の１つです。今となっては、月に旅行に行くことができるかもしれないという報道もあり、宇宙が今までよりも身近なものになっていると感じますが、なかなか「宇宙に行きたい！」「自分でロケットを作ってみたい！」と思っても、実現することができない人が多いのではないかと思います。（私もプラネタリウムやロケット関連の映画はとても好きでしたが・・・）とても優秀でなくてはならず、お金も莫大にかかってしまう、だから「私には無理だ」と思いがちなのが「宇宙」ではないか？これが植松さんの考えです。みんなが憧れる宇宙というものが、みんなに「どうせ、無理」と思わせるきっかけになっているのではないか、だから植松さん自身が宇宙開発事業に挑戦することを通して、みんなが「どうせ、無理」と思わなくなる世界を創っていきたい、これが植松さんの「夢」だといいます。

思い返してみると、私たちはいつから「どうせ、無理」と思い始めてしまったのでしょうか。植松さんの場合は、小学校のときの担任の先生が口癖のように、宇宙をめざす植松少年に対して「どうせ、無理！」と伝えてきたことが苦い記憶として残っているようです。みなさんも「どうせ、無理」と言ったこと、言われたことはありませんか？そのとき、どんな感情だったでしょうか？

［「どうせ、無理。」ではなく、「だったら、こうしてみたら？」で夢は叶う！］

「どうせ、無理」が連鎖していくと、どうなってしまうのか・・・というのはもう少し深い内容なので、次回改めてお伝えします。植松さんは「どうせ、無理。」を「だったら、こうしてみたら？」に変えてほしいと熱弁します。植松さんは、自分一人だけでは「どうせ、無理」をなくすことはできない、だからみんなにも「どうせ、無理」ではなく、「だったら、こうしてみたら？」に変えてほしい。夢の実現には、みんなの協力が大切だ。そう伝えて公演は終わります。是非、「どうせ、無理」から卒業しましょう。